

藩文庫の漢籍資料瞥見

西 一夫

一 はじめに

信州大学教育学部附属図書館所蔵の特別コレクションとして「藩文庫」が存在する。平成四年に作成された『旧長野師範学校所蔵図書』及び「信州諸藩の藩校図書」目録等の記載によれば、当該文庫の概要は以下の通りである。

信濃国各藩校の和漢書一二四点一一八〇冊。

内訳は高島藩長善館五九点(六〇八冊)、飯田藩読書場四八点(四一七冊)、松本藩崇教館二点(四三冊)、竜岡藩尚友館一五点(一一二冊)で、竜岡藩を除く三藩の図書は、明治維新後、旧筑摩県学を集められたものが、教育学部の前身長野県師範学校に移管所蔵され、さらに、昭和二四年五月、同校が信州大学に統合されるに及んで教育学部の蔵書となったものである。

このコレクションには、明代の汲古閣版『十三經註疏』(一一九冊)、清代の道光年間(一八二一〜一八五〇)阮元(一七六四〜一八四九)編『皇清經解』(三六〇冊)、同統編(三二〇冊)などが含まれている。

平成二六年度信州アカデミア(信大COO事業)の支援を受けて「信州教育」関連史料群の整備・公開と質的特徴の解明―信州諸藩の藩校図書と顕彰碑の調査―^①と題する書誌調査を行った。史料群の全体像を解明することは十分に果たせなかったものの、調査資料の傾向をある程度把握することができた。その結果の一部を報告する。

二 「藩文庫」の現状

現在の「藩文庫」の状況は、特別コレクションと位置づけながら、平成四年の目録作成以降、ほとんど利用・調査された形跡はなく、図書館の改修工事などの影響で段ボール詰めされたままで倉庫に保管されている^②。

また、平成四年作成の目録題目にも示されているように長野師範学校所蔵図書とあわせて一コレクションと位置付けられている。平成四年の調査時点では長野師範学校所蔵本と藩文庫とは区別できる状態で保管されていたものの、改修工事に伴う移転作業の過程で両者は混

在し、現在の状態で保管されていると言える。そのため蔵書印等の状況を見ながら平成四年目録との突き合わせを行う必要があった。なお、平成四年作成の目録では、次のような状況が生じていることが判明している。

特徴的な例として師範学校と高島藩所蔵の『日本書記』版本を示す。

長野師範学校の所蔵印を有する『日本書記』版本が目録上では二種類存在する。再調査による書誌情報で示すと以下の通りである。

日本書記 25. 9×18. 5 四冊 刊 江戸

末 欠(四のみ)

日本書紀 25. 7×18. 5 一一冊 刊

巻数・判型等の書誌情報からすれば一連の資料として扱うべきと判明する。

同様な状況は高島藩旧蔵本にも見られる。『日本書紀』の冒頭「神代」の版本が二種類存在している。再調査による書誌情報で示すと以下の通りである。

神代巻 25. 3×17. 9 一冊 刊

神代巻 25. 2×17. 9 一冊 刊

内容から『日本書紀』冒頭の「神代」(上下)であることがわかり、判型からも一連の資料として扱うべきと判明する。

このように目録を手がかりにした調査を実施したものの、実見調査に基づく目録の再整備の必要がある。そのような整備は、異なる資料を再分類して本来の「師範学校所蔵図書」と「藩校図書(藩文庫)」として位置付け直すことが急務であると言える。しかも「師範学校所蔵図書」には、県歌「信濃の国」の作詞者であり、長野師範学校で教鞭を執った浅井列の遺族から寄贈された「浅井列文庫」が内包されており、別立てでの整理が求められる。

三 「藩文庫」の特徴—高島藩の所蔵本—

高島藩の藩校「長善館」の所蔵本は五九点(六〇八冊)の存在が目録で確認されている。これらの所蔵本を見ると高島藩での教育内容の傾向が見えてくる。まず注意したいのは以下のような書籍群である。

A 訂正古訓古事記(三冊)・古事記(三冊、三組)・

新刻古事記之端文(三冊)・日本書紀神代巻(二冊、

元禄八年)

B 万葉考(五冊)・万葉考別記(三冊)・加茂翁家集

(五冊)

C 源氏物語湖月抄(六〇冊)・源氏物語玉の小櫛(九

冊)・古今和歌集(二冊)・後撰和歌集(二冊)

いずれも国文学関係の書籍であり、Aは古事記・日本書紀関係の史料、Bは万葉集関係で国学者賀茂真淵の書籍を中心とする史料、Cは源氏物語や勅撰和歌集の史料群である。明治二年に開設された高島藩の国学校での皇学生の教授過程に用いられた作品群は以下の通りであったことがわかる^⑧。

【句読による教授】

古事記・古語拾遺・皇朝史略・皇典文集・延喜式祝詞・続日本紀・祝詞・万葉集・日本紀・令

【講義による教授】

古事記伝・万葉集略解・祝詞考・歴朝詔詞解・日本書紀通証・大日本史・六国史・令・律・格・式

いずれもA・Bと重なる史料群であることがわかる。これらの中でAに分類される『日本書紀神代卷』(二冊)の特徴に触れておきたい。

本書は慶長勅版をもとにして慶長四(一五九九)年板の誤謬を正して刊行した。全巻にわたって朱墨紺青の書入れがある。ただし、それぞれは以下のような使い分けが行われていると考えられる。

朱・刊本の傍訓の修正・加筆
墨・欄外の本文に関する書入

紺青・匡郭内の本文誤脱や書入

また下巻表紙裏には諸本の略称を一覧(一一本)としており、そのほかに一〇本の参照本が列挙されている。書入れの内容は『書紀集解』に見られる訓を示しながらも、これ以外の訓も参照して書入れられている。加えて匡郭外に墨で書きこまれている本文に関する書入れは、参照諸本等を広く見たうえで校訂されていると考えられる。

高島藩の藩校長善館の成立には、石城南陔(宝暦五「一七五五」年四月、文政五「一八二二」年二月)の存在が大きい。彼は天明五「一七八五」年信濃高島藩主諏訪忠肅の侍読に任せられる。その後、享和三「一八〇三」年藩命によって稽古所を開設して家塾教育をおこない、後に藩校長善館へと発展する。

藩校での教育内容は漢学(四書五経など)が中心であった。その後、明治二(一八六九)年五月に藩内に国学校が設立されるに至る。この国学校での教育内容は万葉集や記紀に始まり六国史などの史書に広がり、さらには歴朝詔詞解(本居宣長)、万葉集略解(橘千蔭)等の古典籍の注釈までが取り上げられた。そうした教育を一手に引き受けていたのが飯田武郷(文政一〇「一八二八」年一二月、明治三三「一九〇〇」年八月)であった。飯田は幕末・明治の国文学者であり、高島藩の国学校開設にあわせて教授

として教鞭を執った。明治九(一八七六)年に改めて大教院に召されて、後に国史編纂事業に参加した。明治一三(一八八〇)年以後、東京帝国大学をはじめ、慶應義塾・國學院などで古典を教授している。明治三〇(一八九七)年に眼病を理由に教職を辞し、以後『日本書紀通釈』の完成に全力を注ぎ、明治三二(一八九九)年執筆開始から四八年目に完成している。本書と国学校での飯田武郷の活躍との関連は定かではないけれども、書き入れの内容を『日本書紀通釈』と比較することは、飯田の学問研究の一端を説明する上で貴重であるう。

四 まとめにかえて

書誌調査を行った資料には、先掲の長野師範学校所蔵本『日本書紀』(一五冊)も興味深い内容を有する。

全巻にわたって尾張藩士の河村秀根とその二子、殷根、益根の共著になる『書紀集解』からの朱筆書き入れがある。『書紀集解』は天明五(一七八五)年から約二〇年かけて刊行された江戸時代を代表する注釈書である。注釈の中心は『日本書記』の本文研究であり、古来の伝承をそのまま漢文にしたと考えられてきた表現が、実際には中国の古典籍や仏典の文章・表現・語彙を豊富に利

用したとして、多数の出典を挙示した。本書では、本文や双行注の乱れを『書紀集解』を参照しつつ行間に書き入れている。また一五冊の巻末には「慶応二年四月以集解本校合畢」林□の識語がある。

このように所蔵資料を通して藩校での学問研究や教授実態を垣間見ることが出来る。

注

①本申請課題は、西の他に高橋渉・谷塚光典・小林比出代・篠崎正典の四名によって調査を実施した。

②その後、平成二七年度に人文学部の白井純・速水香織によって「藩文庫」全体の再調査が実施されている。現在、藩校・師範学校の再分類と書誌調査がなされている。

③教授過程の実態については、千原勝美『信州の藩学 近世の藩学全研究』(郷土出版社、一九八六年)参照。

附記

本稿は平成二六年度信州アカデミア(信大COO事業)「信州教育」関連史料群の整備・公開と質的特徴の解明―信州諸藩の藩校図書と顕彰碑の調査―による調査成果の一部である。

(平成二七年九月一日稿)

(にし) かずお 信州大学教育学部)